

歌人ヴァルター・フォン・デア・ フォーゲルヴァイデの生まれ故郷

林 部 圭 一

オーストリアの首都ウィーンから西北に、ドナウ川をさかのぼるようにして車で2時間ほど走ったところは、ヴァルトフィアテル地方（Waldviertel）と呼ばれる。ドナウ川の北側にチェコの国境まで広がる森林・農業地帯である。このヴァルトフィアテル地方の小都市ツヴェトル（Zwettl）の近郊に、中世歌人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデが生まれたのだとする説がある。郷土史の研究者ヴァルター・クロムファル（Walter Klomfar）氏などの主張するところである。

歌人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの生まれ故郷については諸説がある。なかでもヴァルトフィアテル説、南チロル説、フォイヒトヴァンゲン説、フランクフルト説などが知られている。ここでは、そのうちの一つ、オーストリアのヴァルトフィアテル地方、なかでもツヴェトル近郊アレントシュタイクのフォーゲルヴァイデであるとするクロムファル氏の説を紹介しながら検討してみたい。

クロムファル氏は、このツヴェトル近郊のシトー会系修道院に残る古文書こそが、歌人ヴァルターの生地に関する重要な手がかりであるという¹⁾。クロムファル氏が指摘する古文書の地図には、フォーゲルヴァイト（Vogelwaidt）という地名が登場する。氏は、このフォーゲルヴァイトこそは、歌人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの故郷であり、歌人の名前の由来する土地である、というのである。

ツヴェトルの修道院に残っていた地図とは、1663年に修道士たちによって作られたヴァルタース村（Walthers）の地図である。このヴァルタース村の地図

では、1 から 12 まで番号が付された地区があり、それぞれの地区名が示されている。そして 12 番の地区には名前がフォーゲルヴァイト (Vogelwaidt) と書かれている。ヴァルタース村の集落地区に東側で接する地区である。²⁾

なぜこの地図が作られたかという、この地方の土地所有者がツヴェトル修道院に対して領地をめぐる訴訟を起こしたからである。地図は裁判のためにつくられた。そしてこの裁判は修道院側が勝訴した。³⁾ 地界が古くからあいまいであった土地だが、当時の所有者と修道院との間での土地争いが訴訟にまで発展し、13 世紀に消滅した村の再現図が作られたのだった。⁴⁾ そもそも歌人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの名前になっているフォーゲルヴァイデと呼ばれる場所は数多く存在する。低地オーストリア地方にだけでも 14 箇所あるという。⁵⁾ 「フォーゲルヴァイデ」というのは辞典によれば、「野鳥が棲んでえさを食べたりするところであり、野鳥を飼育、保護するとともに、狩るところ」である。⁶⁾

したがってヨーロッパのいろいろな所で、貴族の領地には食料確保やとりわけ娯楽の鷹狩のための鷹を捕獲し訓練する場所や鷹を使っての鳥の猟場としての「フォーゲルヴァイデ」が存在したのである。

いくつもあるそうした「フォーゲルヴァイデ」のうちから、ツヴェトル近郊アレントシュタイクの「フォーゲルヴァイデ」にクロムファル氏が注目するのは、これがヴァルタース村に隣接するからである。

クロムファル氏はこの「ヴァルタース」という村の名前を特別視し、歌人の名前ヴァルターはこの村の名前「ヴァルタース」からきていると考えるのである。そして歌人の名前のフォーゲルヴァイデのほうは隣地の「フォーゲルヴァイト」からとって、歌人が名乗ったという。

氏によればヴァルタース村は、歌人の父親ヴァルターが開墾してつくった新村である。歌人の父親は開拓者として自分の名前を村の名前にしたのである。

しばらくクロムファル氏の説くところにしたがってみよう。⁷⁾

ヴァルタース村の農地は細長い短冊の形ををしている。こうした形の農地

がこの地方に発生したのは、歴史家（Adalbert Klaar）によると、12世紀後半なのだという。この時期にヴァルタース村の領域はアレントシュタイク（Allentsteig）に居をかまえる者の支配下にあった。

1150年の古文書にはアレントシュタイクの周りにある村の名前が挙げられている。しかしヴァルタース村の名前はこのなかには出てこない。したがってヴァルタース村は1150年よりも後に成立したと考えられる。ヴァルタース村の名前が古文書に最初に登場するのは1275年5月17日の文書である。それはフリードリヒ・フォン・リーヒテンシュタインなる者がヴァルタース村の所有地をイムバハ修道院に売却したときのものである。その後1280年、1311年、1346年などにヴァルタース村の名前がツヴェトル修道院の持つ村内の所有地との関わりで文書に登場する。⁸⁾

ヴァルタース村に東側で隣接するフォーゲルヴァイデは、1380年に初めて文書に登場する。そこでは72デナールの収益が上がるかとされているという。この、主として森と草原からなるフォーゲルヴァイデへは隣地のヴァルタース村の集落から「古い道」が通じているように地図では描かれている。この道は農家へと通じていたのかもしれない。フォーゲルヴァイデの広さは、もともとはかなり広がった。隣接する地区ペルヴァイス（Perweis）やベルンシュラーク（Bernschlag）地区にもフォーゲルヴァイデとされる土地が点在するところから、もともとはフォーゲルヴァイデであった所が後に成立したペルヴァイスやベルンシュラークに侵食されていったと考えられる。そうした土地がおおよそ10ヨッホ（ヨッホとは辞書によれば1頭の牛を使って1日に耕せる畑地の広さの単位で、35-55アールぐらい）あって点在していたわけだから、フォーゲルヴァイデはかなりの広さであったろう。歌人が名乗るにあたって自分の名前に取り入れるには意義ある役割をはたすにふさわしい地名であったといえる。フォーゲルヴァイデと呼ばれていた地域は時の流れとともに後に成立したペルヴァイスに侵食されて、この地域はその後ペルヴァイスと総称されるようになった。⁹⁾

ヴァルタース村が成立したと考えられる時期にこの地域は、アレントシュタイク（Allentsteig）に居をかまえる者の所有であった。この時期の所有者と

考えられるのは、アレントシュタイクのマルクヴァルト (Marquard de Tige) である。このマルクヴァルトとその妻ギゼラは 1175 年にツヴェトル修道院に寄贈している。その寄進状には 23 人の証人の名前が記されている。彼らの多くはアレントシュタイク近郊の地の出身者だが、なかに数人出身地として de Tige と書かれている者たちがいる。Tige とは Allentsteig の当時の呼称である。したがって「de Tige」とは「アレントシュタイクの」という意味である。そしてその数人のなかにヴァルターという名前が登場する。つまり、アレントシュタイクのヴァルター (Walther de Tige) という人物の名前が寄進状に証人として記されているのである。このヴァルターは、アレントシュタイクのマルクヴァルトの家来のひとりと考えてよいと思われる。家来たちは主人の城に住んでいて、出身や所属を示すために主人の城の名前を自分の名前の一部にしていたからである。

城の家来たちは、当時この地方で、従者たちとともに森を切り開き、村を建設し、自分たちの名前を村の名前としたのである。「ヴァルタース」村の名前のうちの最後の「ス」はドイツ語の 2 格語尾であり、個人の名前を 2 格にして地名となっているものはこの地方にはかなりあるのだという。¹⁰⁾ したがってヴァルタース村はヴァルターという者によって建設されたと考えてよいのだ。アレントシュタイクのマルクヴァルトの家来であった者がご主人の支配地に新しい開拓村を作り、自分の名前のうちヴァルターを活かして村名を「ヴァルタース」としたと考えられる。そしてこの建設者であるヴァルターとは寄進状に出てくるアレントシュタイクのヴァルターという人物と考えてよいのではないか。そしてこのヴァルターという人物が、自分の村とつながる隣の広い土地「フォーゲルヴァイデ」にちなんで、「ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ」と名乗った可能性がある。しかしこの人物は、われわれの歌人その人ではない。歌人の父親である。歌人は 1170 年から 1190 年にかけて青年時代をすごしているからである。歌人の父である「ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ」が自分の開いた村に自分の名前「ヴァルター」を与えて村名を「ヴァルタース」とし、自分の息子に自分の名前をそのまま受け継がせ

て、その息子が歌人「ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ」となるのである。¹¹⁾

以上がクロムファル氏の考えるところである。

クロムファル氏の説の特徴は、たくさんあるフォーゲルヴァイデのなかから隣地がヴァルタースという名前の村であるものに着目したところである。ヴァルタース村がヴァルターという男とゆかりのある村であるというのは受け入れられる。そしてヴァルタース村を作った人物がアレンシュタイク城の家臣であるという点も受け入れてもよい。

しかし、このヴァルターなる人物がアレントシュタイク城に居るときには「アレントシュタイクのヴァルター」と名乗っていて、ヴァルタース村を作ってから、隣地の「フォーゲルヴァイデ」という呼称を拝借して、「フォーゲルヴァイデのヴァルター」と名乗ったとするとところからは推理の力の働기가大きくなっていくようだ。

また、このヴァルターなる人物が1175年の寄進状に証人として登場する者だとするところは、そうかもしれないと思えるが、そうなるとこの者は歌人ヴァルターよりも年齢が上になってしまう。そこでクロムファル氏は、この者は歌人の「父親」だということにして年齢合わせをしているのである。

クロムファル氏はさらに歌人ヴァルターが「ヴァルタース村」および「フォーゲルヴァイデ」の出身であることを示してくれるものとして、歌人ヴァルターの「老いを嘆く歌」とこの地域の変貌との一致を指摘する。¹²⁾ クロムファル氏によると、ヴァルタース村やフォーゲルヴァイデが次第に荒廃していくさまは、ヴァルターの晩年の歌、『老いを嘆く歌』と重なるという。新しくできた「ペルヴァイス」村が「フォーゲルヴァイデ」を開墾、耕作することによって侵食していく。ヴァルターが長い歳月の後に故郷を再訪したときに見て歌にしたふるさとの変貌の様子は、ちょうどこの時期に低地オーストリアが受けていた畑地化に対応しているというのである。

ヴァルターは、この『古いを嘆く歌』で、ふるさとの変貌を次のように歌っている。

以前には自分の手のひらのように知っていたことも
 いまや見知らぬものになっている。
 わたしが子どものときから育った土地や人びとよ
 それらはまるでうそであったように、よそよそしくなっている。
 遊び相手だった者たちも、いまは老いて、ものうげだ。
 森は開墾され、畑地がつくられている。
 もしも川の水がむかしと同じように流れていなければ、
 まったく、わたしの不幸はじつに深いと思ってしまうところだ。¹³⁾

この歌で歌っている「土地」や「人びと」とはどこのことであるのかを特定できれば、そこがヴァルターの故郷であろうと考えられる。

クロムファル氏はこのあたりのところをトゥム (Bernd Thum) 氏の考えに負っている。トゥム氏の考えを見てみよう。¹⁴⁾

トゥム氏は、この詩を「十字軍遠征への参加を呼びかける歌」という視点からとらえる。ヴァルターがこの詩で歌っているのは単に「古いの嘆き」ではない。故郷の変貌ぶりから、この歌を聴く貴族の次男坊、三男坊など家や土地を持たぬ貧乏貴族に、「この地に居続けてももはや将来はない。より良い将来を切り開くためには十字軍の遠征に参加したまえ」と勧めているのだという。

詩の一節に「森は開墾され、畑地がつくられている」とある。これは、歌人が何十年ぶりに故郷を再訪して、「自然破壊」が進んだのを見て嘆いているということだけではないのである。

トゥム氏によれば、ここには政治的社会的変化が表わされているのである。「中世には森は政治的概念であり、支配と結びついていた。」¹⁵⁾ この詩の「畑、森、川」という語は、深刻な政治・経済的危機を象徴するものとして重要な役割をもっている。¹⁶⁾ 森が切り開かれ、畑が作られて開墾と定住が進むということ

は、「地域支配者による開発の独占化、制限化」¹⁷⁾が進み、新しい者が入り込む余地がなくなることである。

11世紀に始まる商業活動の活発化は、技術の進歩、人口の急増、市場経済の成立などへと進むが、それは画期的な開墾運動、新村建設の運動となっていく。広大な東部や西部に残る森林地帯がその対象になる。いわゆる「農業革命」は貴族による土地支配や土地開発を推し進めた。しかし、西部ドイツではこの開発、領有化は1200年ごろには終了する。¹⁸⁾

では、ヴァルターが子どもだったころには森林が豊かに残っており、ヴァルターが再訪したときには、森の木は切り倒され畑が作られているところはどこか。ヴァルターは1170年前後に生まれて、1230年ごろに亡くなっているから、この時期に開墾が進められた地方はどこかということになる。それは東部に求められる。

東部のどこかということは、詩形からもうかがえる。

トゥム氏は、この十字軍への勧誘の歌に選ばれた詩形から、地域はバイエルン・オーストリア地方のドナウ川流域であるというのである。¹⁹⁾ヴァルターがこの詩に選んだ詩形は、『ニーベルンゲンの歌』にも用いられているドナウ川流域の長詩形(donauländische Langzeile)と呼ばれる形式である。これは偶然ではない。13世紀の抒情詩や政治風刺詩でこのタイプの詩形が使われることはまれである。ヴァルターはあきらかに意図して、特定の地域の聴衆を狙ったのである。それはドナウ川流域の貴族たちであった。ヴァルターが地域を意識させる詩形を選び、自分の故郷の変貌振りから詩を始めているのは、ヴァルターがこの地域の出身だからであるという推測を可能にしている。²⁰⁾

ヴァルターは、ドナウ川流域のうちでも、子どものころにはつまり1170年から1190年のあいだにかけては、まだ広い森林が残っていたところ、まだ支配が固まらず、これから開墾が可能であったところに育った。しかし、この条件はオーストリアのすべての地域にあてはまるわけではない。すでに新参入者による開拓は終了し、境界線の明確化がもとめられている地域もある。それにもかかわらず、ヴァルトフィアテル地方は、この12世紀後半でも、それどこ

るか 1200 年ごろでも、比較的大きな規模の開拓、支配地形成が可能であった。²¹⁾ ヴァルターは 1220 年代になって故郷をようやく再訪できた。そのときに土地と人々の変貌ぶりから彼が受けたショックは大きかった。「ドナウ川流域のバイエルン・オーストリアで 1180/90 年から 1220 年ごろのあいだに比較的規模の大きな開拓がおこなわれたのはどこであろうか？」とトゥム氏は問う。しかも、主要な国道から離れたところでなければならぬ。よく旅をしたヴァルターであるから、国道に近ければ、立ち寄ることができたはずであり、そうすると再訪したときの驚きを説明できない。そうすると有力な候補としてあがってくるのが、ヴァルトフィアテル地方である。なかでもアンシャウ (Anschau) やトラウンシュタイン (Traunstein) である。²²⁾ すなわちトゥム氏は、この詩の詩形、開拓の時期、主要街道からの遠さ、ウィーン宮廷での修業、生涯を通してのウィーン宮廷への執着などから、「この十字軍への参加を呼びかける詩の解釈にもとづいて、オーストリアの歴史的地名簿を見た結果、アンシャウからも遠くない、エーデルバッハ溪谷にある、リヒテナウ近郊の(今のトラウンシュタインの)フォーゲルヴァイデがそれだと確認できた」というのである。²³⁾

歌人ヴァルターの故郷は、同じヴァルトフィアテル地方のフォーゲルヴァイデでも、トラウンシュタイン近郊のフォーゲルヴァイデであるというトゥム氏の説にたいして、クロムファル氏は、ヴァルトフィアテル地方にまで絞り込むところはトゥム氏の考えを採り入れながらも、アレントシュタイク近郊のフォーゲルヴァイデのほうだとする。

トラウンシュタインとアレントシュタイクとは、地図で見ると直線距離でおよそ 30 数キロ離れているにすぎない。どちらも同じような条件を備えているのである。

しかし、クロムファル氏の主張するアレントシュタイク近郊のフォーゲルヴァイデの方は、ツヴェトル修道院との関係がうかがえる。このフォーゲルヴァイデがツヴェトル修道院の所有権をめぐる裁判の資料に登場しているというのである。ツヴェトル修道院につながりがあれば、子どもたちはこの修道院で教育を受ける機会があったということになる。ヴァルターはラテン語を読め

たと思われるから、そうした知識はこの修道院で習得したと考えることができる。

ツヴェトル修道院とのつながりからは、ヴァルターにとってはさらなる展望も開けてくる。ツヴェトル修道院はシトー会が設立した修道院で、パッサウの司教区所属していた。したがってツヴェトル修道院とパッサウ司教とのあいだには交流があったはずである。ツヴェトル修道院で学んだ若者が、機会を得て、パッサウ司教の知るところとなり、司教の引き立てを得るということも可能であろう。ヴァルターとゆかりのあるパッサウ司教はヴォルフガー (Wolfger von Erla) であるが、ヴォルフガーは 1191 年にパッサウの司教になっている。それはヴァルターが 20 歳前後のことである。ヴァルターがウィーンに出て、歌人となる修業を始めることが可能になる時期でもある。

パッサウの司教ヴォルフガーの名前は「エルラのヴォルフガー (Wolfger von Erla)」というが、もし「エルラ (Erla)」が彼の故郷だとすると、ヴォルフガーは、パッサウとウィーンのあいだのほぼ中間に位置し、ツヴェトルから 60 キロか 70 キロほど離れたドナウ川の流れにごく近い場所で生まれ育ったことになる。²⁴⁾ ヴォルフガーがヴァルトフィアテル地方の修道院に関係する子どもたちに親近感をもったとしても不思議ではない。司教ヴォルフガーは有能な外交官であったから、ウィーンのパーベンベルク家とつながりがあった。

クロムファル氏の説は、ヴァルターがパッサウ司教の推挙を得てウィーンの宮廷に受け入れられていく可能性を考えさせるのである。

それになんといっても、歌人ヴァルターの名前が司教ヴォルフガーの旅行記録のなかの 1203 年 11 月 12 日のところに登場することである。これもまたヴァルターとパッサウ司教とのひとかたならぬつながりを示しているとも考えることもできる。

当時ヴァルトフィアテル地方一帯を領有する豪族はクエンリング家 (die Kuenringer) であった。そもそもツヴェトルの修道院を建設したのがクエンリング家である。1138 年のことであった。²⁵⁾ したがってツヴェトル修道院で学んだ若者が、修道院とクエンリング家とのつながりから、クエンリング家の知る

ところとなり、さらにはウィーンへ出る機会をつかむことができたかもしれない。

加えて、クロムファル氏の説の興味深いところは、「ヴァルタース」村の名前と歌人ヴァルターのとのかわりである。歌人ヴァルターの故郷を考える諸説の多くが、「フォーゲルヴァイデ」という名の土地に基づいて探求を進めているのにたいして、クロムファル氏の説は「フォーゲルヴァイデ」という名の土地の存在だけでなく、歌人の個人名「ヴァルター」のかわりにも注目して、個人名「ヴァルター」からも説明しようとするものである。隣地が「ヴァルタース」という名の土地であるところから、もうひとつの手がかりを提示しているということで、クロムファル氏の説には興味深いものがある。

総じて、クロムファル氏の説は、歌人ヴァルターの故郷に関する諸説のなかでは関心を強く引くものをもっていると思われるが、ヴァルターの晩年を考慮に入れるとき、この説はヴァルターの前半の人生からの説明となっていて、晩年とのつながりが見えてこないくらいがある。ヴァルターの墓はヴェルツブルクのノイミュンスター教会にある。ドイツのフランケン地方である。フランケン地方を故郷とする説は、ヴァルターの晩年の人生に注目するからである。

クロムファル氏の説では、ヴァルターは故郷とは無関係の土地で晩年を過ごし、生を終えたことになる。

注

- 1) Walter Klomfar, War Walther von der Vogelweide ein Waldviertler? In: Das Waldviertel 40 (1991), S. 344.

クロムファル氏はほかに以下のもので同じように自説を展開している。

Walter Klomfar, Die „Vogelweide“ von Walthers bei Allentsteig im Waldviertel. In: Das Waldviertel 36 (1987) S. 209–217.

Walter Klomfar, War Walther von der Vogelweide ein Waldviertler? Eine neue Hypothese über die Heimat des Dichters. In: Unsere Heimat. Zeitschrift des Vereins für Landeskunde von Niederösterreich. 61 (1990) S. 3–11.

Walter Klomfar, Walther von der Vogelweide und das Waldviertel. Zwentler Zeitzeichen 3, Stadtgemeinde Zwentl 2000.

Walter Klomfar, Das Waldviertel. Die Heimat Walthers von der Vogelweide. Eine Theorie stellt sich vor. Zwentl 2002.

- 2) 地図については

- Walter Klomfar, War Walther von der Vogelweide ein Waldviertler? In: Das Waldviertel 40 (1991), S. 345.
- Walter Klomfar, Walther von der Vogelweide und das Waldviertel. Zwiettler Zeitzeichen 3, (2000), S. 20.
- Walter Klomfar, Das Waldviertel. Die Heimat Walthers von der Vogelweide. Eine Theorie stellt sich vor. Zwiettl 2002, S. 21.
- 3) Walter Klomfar, War Walther von der Vogelweide ein Waldviertler? In: Das Waldviertel 40 (1991), S. 344.
 - 4) Walter Klomfar, Walther von der Vogelweide und das Waldviertel. In: Zwiettler Zeitzeichen 3, Stadtgemeinde Zwiettl 2000 S. 19.
 - 5) Walter Klomfar, Walther von der Vogelweide und das Waldviertel. In: Zwiettler Zeitzeichen 3, Stadtgemeinde. Zwiettl 2000. S. 18.
 - 6) Mathias Lexer, Mittelhochdeutsches Handwörterbuch. Leipzig 1878. Bd. 3, S. 427.
 - 7) この箇所は注 1) に挙げたクロムファル氏の諸著作を参照している。なかでもとくに Walter Klomfar, War Walther von der Vogelweide ein Waldviertler? In: Das Waldviertel 40 (1991) S. 343–351 を利用した。
 - 8) Walter Klomfar, War Walther von der Vogelweide ein Waldviertler? In: Das Waldviertel 40 (1991) S. 344.
 - 9) *ibid.* S. 344.
 - 10) *ibid.* S. 347.
 - 11) *ibid.* S. 348.
 - 12) *ibid.* S. 349.
 - 13) L. 124, 5.
 - 14) この箇所は以下のものを参照している。

Bernd Thum, Die sogenannte „Alterselegie“ Walthers von der Vogelweide und die Krise des Landesausbaus im 13. Jahrhundert, unter besonderer Berücksichtigung des Donau-Raumes. In: Literatur, Publikum, Historischer Kontext. Hrsg. von Joachim Bumke, Thomas Kramer, Gert Kaiser, Horst Wenzel. 1977. S. 205–239.

Bernd Thum, Walther von Vogelweide und das werdende Land Österreich. In: Katalog zur niederösterreichischen Landesausstellung ›Die Kuenringer. Das Werden des Landes Niederösterreich‹ 1981. S. 487–495.
 - 15) Bernd Thum, Die sogenannte „Alterselegie“ Walthers von der Vogelweide und die Krise des Landesausbaus im 13. Jahrhundert, unter besonderer Berücksichtigung des Donau-Raumes. In: Literatur, Publikum, Historischer Kontext. Hrsg. von Joachim Bumke, Thomas Kramer, Gert Kaiser, Horst Wenzel. S. 208.
 - 16) *ibid.* S. 223.
 - 17) *ibid.* S. 213.
 - 18) *ibid.* S. 215.
 - 19) *ibid.* S. 225.
 - 20) *ibid.* S. 225.
 - 21) Bernd Thum, Walther von Vogelweide und das werdende Land Österreich. In: Katalog zur niederösterreichischen Landesausstellung ›Die Kuenringer. Das Werden des Landes Niederösterreich‹ 1981. S. 492.
 - 22) *ibid.* S. 493.
 - 23) *ibid.* S. 494.
 - 24) Werner Goetz, Lebensbilder aus der Mittelalter. Die Zeit der Ottonen, Salier, und

- Staufer. Darmstadt 1988. S.389.
- 25) Österreich Lexikon Bd. 1, hrsg. von Richard und Maria Bamberger, Ernst Bruckmüller, Karl Gutkas. 1995. S. 659.

Bemerkungen zu einer Hypothese über die Heimat Walthers von der Vogelweide

Keiichi Hayashibe

Hier wird eine Hypothese über die Heimat Walthers von der Vogelweide, die der Heimatforscher Walter Klomfar aufgestellt hat, vorgestellt und kommentiert.

Nach eigenen Angaben konnte Klomfar sich im Archiv des Stiftes Zwettl in Niederösterreich eine Zeichnung des Dorfes „Walthers“ genauer ansehen, die für einen Prozess gegen das Stift Zwettl angefertigt wurde. Diese Zeichnung weist eine Vogelweide auf, die unmittelbar an das Dorf Walthers angrenzt. Walter Klomfar meint, dass es sich bei diesem Dorf und der Vogelweide um die Heimat des mittelalterlichen Dichters Walther von der Vogelweide handelt.

Während es ziemlich viele Orte gibt, die „Vogelweide“ genannt wurden, konnte Klomfar auf der Basis einer Theorie von Bernd Thum den Ort der Heimat auf das Waldviertel in Niederösterreich beschränken. Unter einigen möglichen Vogelweidhöfen im Waldviertel scheint die von Klomfar genannte Vogelweide aus einigen Gründen interessant.

Seine Vogelweide liegt ziemlich nahe beim Stift Zwettl, ungefähr 40 km entfernt. Die Beziehungen zwischen dem Stift und dem Dorf lassen sich auch daraus erschließen, dass der Name Vogelweide in der oben erwähnten Prozessschrift erwähnt ist. Auf Grund dieser Beziehungen hatten die Kinder des Dorfes möglicherweise Gelegenheit, im Stift die Schule zu besuchen, von den hohen Klerikern gekannt zu werden und mit ihrer Hilfe den Hof in Wien besuchen zu können. Das Stift Zwettl lag in der Diözese von Passau. Es kann sein, dass Walther von der Vogelweide auf diesem Weg dem Passauer Bischof bekannt wurde, der ihn nach Wien brachte, um dort das Singen und das Dichten lernen zu können.

Das Stift Zwettl wurde von der Familie der Kuenringer gegründet. Die Kuenringer waren damals im Waldviertel eine der herrschenden Familien. Die Beziehungen zwischen dem Stift und dem Dorf lassen auch vermuten, dass der Dichter mit Hilfe der Kuenringer den Wiener Hof besuchen konnte. Die Lage des Orts und die Beziehungen machen die Hypothese Klomfars im Vergleich mit anderen Hypothesen wahrscheinlicher.

Klomfar misst der Tatsache, dass das Dorf Walthers und die Flur Vogelweide aneinandergrenzen, große Bedeutung bei und er erklärt daraus die Herkunft des Namens des Dichters. Nach Klomfar war der Vater des Dichters Gründer des Dorfes, der dem Dorf und dem Dichter seinen Namen gab. Im Unterschied zu anderen Hypothesen macht der konkrete Hinweis Klomfars auf den Zusammenhang von dem Dorfnamen und dem Vornamen des Dichters seine Hypothese interessanter.

Klomfar gründet seine Hypothese nur auf die Möglichkeiten in den früheren Lebensjahren des Dichters. Das Grab Walthers von der Vogelweide im Hof Neumünster in Würzburg lässt vermuten, dass der Dichter in seinen späteren Lebensjahren in Franken lebte. Nach der Hypothese Klomfars könnte der Dichter seine letzten Lebensjahre weit weg von seinem Herkunftsort verbracht haben.